九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

フェヒナーからフロイトへ(1)：グスタフ・テオドール・フェヒナーの系譜(6)

福元, 圭太
九州大学大学院言語文化研究院 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1470429

出版情報：言語文化論究. 33, pp.39-54, 2014-10-14. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

フェヒナーからフロイトへ（1）

――グスタフ・テオドール・フェヒナーの系譜（6）――

福　元　圭　太

はじめに

感覚という心的なものの物理学的な測定、極言すれば「魂の定量的（quantitativ）把握」の手法を開拓し、実験心理学の基礎を築いたフェヒナーと、無意識から意識への力動的（dynamisch）作用を重視し、深層に潜む、定量的には把捉されえない衝動（Trieb）を人間行動の動因としたフロイト ―― 今日「実験心理学」および「深層心理学」と呼ばれている心理学の二大潮流の確立者たちの間には、思想的な懸隔があるように見える。しかしそれは事実とは異なる。フロイト自身も認め、また先行研究でもつとに指摘されているように、フェヒナーとフロイトの間には、非常に密接な繋がりがある。より詳しく言えば、時代的に先行するフェヒナーが、フロイトの心理学、特にメタ心理学に、極めて大きな影響を及ぼしているのである。

本稿の目的は、日本ではあまり注目されていない[1]フェヒナーとフロイトというテーマに関する先行研究を批判的に検討することによって、フェヒナーがフロイトの心理学や思想に与えたインパクトを詳らかにする点にある。

1．先行研究

イムレ・ヘルマン（Imre Hermann; 1925[1], 1926[2]）は、もともと1924年に行った講演をフロイトの雑誌「イマーゴ」（1925年）に掲載した論文で、フェヒナーの生涯と思想を包括的に論じ、またフェヒナーが生死の境をさまよった病気の原因を分析した。その論文の後注でヘルマンは、フェヒナーのフロイトへの影響に言及している。ヘルマンはそこでフェヒナーを「精神分析という認識の先駆者」（Vorläufer psychoanalytischer Erkenntnisse）と位置づけ、フロイト自身、フェヒナーの思想に自らのメタ心理学の萌芽（die erste Ausgestaltung）を見ている（Hermann, 1926; S. 58）、としている。ヘルマンはさらに、フェヒナーとフロイトの両者に共通するものとして、「局所論的思考」（der *topische* Gedanke; 強調はヘルマンによる[2]）（Ebd., S. 58）、心的活動の「エネルギー的な」（energetisch）把握、「安定性の原則」（Prinzip der Stabilität）、「夢の心理学」（*Psychologie der Träume*）、心的なものが葛藤を惹起するという考え、「無意識の実在性」（die *Realität* des Unbewußten）、意識と無意識の間の「半意識」（das Halbbewußte）の想定（Ebd., S. 59f.）（これはフロイトの「第一次局所論」においては「前意識」と呼ばれるようになる）等を挙げている。ここではすでに、フロイトがフェヒナーから受けた影響に関する重要な論点の多くが押さえられていると言ってよいであろう。

次に挙げるべきは1932年のマリア・ドーラー（Maria Dorer; 1932）の論文である。この教授資格要求論文（Habilitation）でドーラーは、まずヘルバルトの心理学がフロイトに与えたインパクトを

詳しく分析し、そののちフェヒナーのフロイトへの影響についても言及している（Dorer; S. 106ff.）。ドーラーの指摘を端的にまとめると、フロイトはフェヒナーから「心理的なものの定量的把握」（das Seelische als ein Quantitatives）、「閾」の概念（der Begriff der „Schwelle“）、「無意識」という着想（Konzeption des „Unbewußten“）、「快－不快原則」（Lust-Unlust-Prinzip）、夢と覚醒が異なる舞台で生じていること（„Schauplatzwechsel“ beim Traumvorgang）等を引き継いだ、となる。ただしドーラーは、「心理的なものの定量的把握」に関して、フェヒナーとフロイトとのスタンスの違いにも注意を促している。すなわちフェヒナーは感覚量を「正確に測定しよう」（exakt messen［wollen］）としたが、フロイトは量的な要因を考慮することのみで満足した（begnügen）（Ebd., S. 109）と論じているのである。ドーラーはまた注の中で（Ebd., S. 109, Anm. 1）、フェヒナーの自然哲学に対するスタンレイ・ホール（Stanlay Hall）の評価を引き、それをフロイトの「死の衝動」と関連づけているが、その議論を深めてはいない。ホールの評価とは、万物は神の意識によって賦霊されているとするフェヒナーの思想を、アニミズム的な世界観との親和性ゆえに「仏教的」であるとし、フェヒナーは「あらゆる西洋の思想家の中でおそらくもっとも東洋的である」（der morgenländischste vielleicht unter allen abendländischen Geistern）（Hall; S. 121f.）というものである。このようなホールの評価自体が妥当かどうかは、議論の余地があるであろう。ドーラーはフロイトが「死の衝動」をめぐる議論で「涅槃原則」（Nirvanaprinzip）という術語を使用したことから、ホールのフェヒナー観を注に引いたものと思われる。フェヒナーの思想が「仏教的」できわめて「東洋的」なのかどうかは本稿の論題ではないが、フェヒナーの恒常性原則がフロイトの「死の衝動」にインスピレーションを与えたことは先行研究においても確実視されている。これについては次稿で取り上げる。いずれにせよドーラーはヘルマンを補い、フェヒナーのフロイトへの影響関係をより鮮明にしたと言えるであろう。

ルートヴィヒ・ビンスヴァンガー（Ludwig Binswanger）も、フロイトの心理学がフェヒナーの「局所論」（Topik）、「快－不快原則」、「心的なものの定量化」（Quantifizierung des Psychischen）の成果の上に成立したと見ている（Binswanger; S. 190）。

1953年にはシュペールマン（Rainer Spehlmann）がやはりドーラーを参考に、ヘルバルトとフェヒナーがフロイトに与えた影響を指摘し、フロイトが「もっとも親しんでいた心理学者はフェヒナーであった」（Er kennt keinen Psychologen besser als Fechner［...］）（Spehlmann; S. 7）としている。その理由をシュペールマンは、フェヒナーが心的なものを「量」としてのみならず、ある種の「力」と捉えており（Ebd., S. 8）、それがフロイトの心的エネルギーの考え方に直結していること、また、「閾」の概念によって、その下に沈んでいる無意識の存在がフェヒナーにおいて明確に打ち出されていること（Ebd., S. 9）にあるとしている。

以降フェヒナーとフロイトというテーマは、その他の文献においては、周縁的に扱われることがほとんどであった。[3] 50年代までの唯一の例外は1956年のアンリ・エレンベルガー（Henri Ellenberger）による論文である。フロイト生誕100年の記念論集に寄稿した論文で、エレンベルガーはヘルマンやドーラーを参照文献に挙げつつ、以下のようにまとめている。

> これまで見てきたように、フロイトはフェヒナーから、直接的あるいは間接的に、精神分析のどちらかといえば理論的な部分についてインスピレーションを得た。それらはとりわけ、心的エネルギー、「局所論的」観点、快－不快原則、恒常性原則ならびに反復原則である。[4]
>
> We have seen that Freud received, directly or indirectly, from Fechner the inspirations for the more theoretical part of psychoanalysis, particularly the concept of mental energy, the “topographical” view-

point, the principles of pleasure-unpleasure, of constancy and of repetition.（Ellenberger; S. 212）

それに続くのがヴィス（Dieter Wyss）の記述である。ヴィスはフロイトにおける心的活動の基本的な把握が、フェヒナーの言う「エネルギー恒常原則」（Prinzip der Konstanterhaltung der Energie）ならびに「快－不快原則」に基づいていることを指摘し、ドーラーを参照しながら無意識に関する議論、また夢と覚醒時の差違に関する議論において、フェヒナーとフロイトとの間には「本質的な一致」（wesentliche Übereinstimmungen）が見られるとしている（Wyss; S. 45）。

これらの成果を引き継ぎつつ、フェヒナーがフロイトに与えた影響を網羅的に記述したのが、ブッグレ（Franz Buggle）とヴィルトゲン（Paul Wirtgen）の共著になるかなり長い論文である。この論文の特徴は、アナロジー的な比較の危険性と限界を十分に意識したうえで、なおかつフェヒナーとフロイトの伝記的なものの並行関係にも注目した点、さらには、これまでの研究がもっぱらフェヒナーの理論的著作、特に『精神物理学原論』（*Elemente der Psychophysik*; 1860）がフロイトに与えたインパクトにほぼ限定されていたという状況を打破し、フェヒナーの自然哲学的な著作とフロイトの関係にも踏み込んだ点にある。第３節以降は特にこの論文を批判的に検討し、フェヒナーがフロイトに与えた影響を詳しく見ていきたい。

サロウェイ（Frank Sulloway; 1979[1], dt: 1982[2]）はやはりフロイトの「死の衝動に関する仮説」や「涅槃原則」とフェヒナーの恒常性原則とを結び付けている（dt: 1982[2], S. 533f.）。

80年代にブリーバッハ（Thomas Briebach）はこのテーマに関する研究史を瞥見しているが、非常に重要であると思われる上記のブッグレ／ヴィルトゲンの共著論文を見落としているのは、残念である。

テーゲル（Christfried Tögel）はその短い論文の中で、夢の理論に関するフェヒナーからフロイトへの影響を指摘している。これまでも指摘されてきた、夢と覚醒時における舞台の交替（Schauplatzwechsel）の他に、夢の理論の枠内でフロイトがフェヒナーから受け取った影響が二つあるとテーゲルは言う。それらは両者とも夢と精神病（Geisteskrankheit）の近似性を指摘している点、ならびに両者の夢研究へのアプローチ方法が共通している点である。後者は睡眠と夢との関係についての議論で、テーゲルの主張によれば、睡眠研究はもっぱら生理学が、夢研究はもっぱら心理学が担当しているのが常であったし、現状もまたそうであるが、フェヒナーもフロイトもその問題性を意識していたという（Tögel; S. 133f.）。テーゲルは、フェヒナーもフロイトも睡眠と夢を一体化して研究すべきであると考えた点に共通性があると述べている。

ニチュケ（Bernd Nitzschke）は「快原則」と「死への衝動」に問題を絞ってフェヒナーのフロイトへの影響を論じているが、論の末尾でフェヒナーからの影響は「死への衝動」の問題のみにとどまらないことを強調し、次のようにまとめている。

> フロイトがその著作で挙げている他のあらゆる心理学者（特にビネ、ヘルムホルツ、ヘルバルト、リップス、ヴント）と比べて、フェヒナーはもしかすると、フロイトの思想にもっとも後々まで影響を与えたと言えるかもしれない。というのもフェヒナーから取り入れた、あるいはフェヒナーの刺激によって生み出された思考は、後の精神分析のあれやこれやといった個々の部分領域のみに関することではなく、細分化された精神分析というシステム全体の基盤に属することであるからだ。そのシステム内部に、フェヒナー思想の水脈を多様に跡付けることができるのである。
>
> Fechner beeinflußte im Vergleich zu allen anderen Psychologen, die Freud in seinem Werk nennt（u.

> a. Binet, Helmholtz, Herbart, Lipps, Wundt), möglicherweise am nachhaltigsten Freuds Denken, und zwar deshalb, weil die von Fechner übernommenen oder angeregten Gedanken nicht nur dieses oder jenes Teilgebiet der späteren Psychoanalyse betreffen, sondern mit zum Fundament gehören, auf dem sich ein weitverzweigtes System aufbaut, in das hinein die Ausläufer Fechnerscher Gedanken vielfältig zu verfolgen sind. (Nitzschke; S. 94)

最近ではエルアール（Béatrice Hérouard）が、おそらくは講演原稿の抄録であると思われる論文で、フロイトはフェヒナーを読むことを通じて、自我（das Ich）がさまざまな心的要因（感覚、記憶、残像（Nachbilder）、想像等）の複合的な結合と離脱（Bindung, Entbindung）からなる「可変的なもの」（zu ständiger Veränderung fähig［sein］）（Hérouard; S. 192）と考えるようになった、と指摘しているが、その論述にはあまり説得力がない。

2．フロイトとその周辺

以上、フェヒナーとフロイトというテーマに関する二次文献を挙げてきたが、フロイト自身もまた何度もフェヒナーに言及している。その著作が年代順に編まれた全集（以降 GW と略し巻号をローマ数字で記す）のインデックスではフェヒナーの名は13回現れる（GW-II/III, VI, XI, XIII, XIV）。[5] フロイトの浩瀚な伝記を書いたアーネスト・ジョーンズ（Jones; 1953-55; dt: 1960-62）も、次のように記している。

> 興味深いことに、フロイトが折に触れてアイデアを借りた唯一の心理学者は、フェヒナーであった［…］。
> Interessanterweise war Fechner der einzige Psychologe, dem Freud jemals Ideen entlieh［...］(Jones; 1960-62, Bd. III, S. 318)

またドーラーも、フロイトにとってフェヒナーが特別な存在であったことを強調している。

> フロイトが科学的心理学の領域の知識に関して自家薬篭中のものとしたのは、精神医学という迂回路を経由して得たものだった［…］しかし心理学から直接知識を得ることはほとんどなかった。フロイトにそれを可能にした唯一例外的な心理学者は、グスタフ・テオドール・フェヒナーである。
> Was Freud an Kenntnissen aus der wissenschaftlichen Psychologie verwendet, hat ihn erreicht auf dem Umweg über Psychiatrie,［...］fast nirgends aber auf direktem Wege. Nur ein einziger Psychologe macht eine Ausnahme: Gustav Theodor Fechner. (Dorer; S. 63)

フロイトもまた、心理学というディシプリンの歴史性、その先駆者たちのことを十分に意識し、『夢判断』（*Traumdeutung*）の出版年が1900年であったことに触れつつ、次のように書いている。

> 精神分析はいわば20世紀と共に生まれた。［…］しかしそれは、自明のことながら、石から飛び出たものでも天から降ってきたものでもない。精神分析はより古いものに接続しつつ、それをさらに発展させ、それらの刺激を消化することから出発するのである。

> Die Psychoanalyse ist sozusagen mit dem zwanzigsten Jahrhundert geboren; [...] Aber sie ist, wie selbstverständlich, nicht aus dem Stein gesprungen oder vom Himmel gefallen; sie knüpft an Älteres an, das sie fortsetzt, sie geht aus Anregungen hervor, die sie verarbeitet.（„Kurzer Abriß der Psychoanalyse“. 1923. GW -XIII, S. 405）

「石から飛び出たものでも天から降ってきたものでもない」心理学の先駆者の名を、フロイトは自伝の中で明示する。すなわち、自らの理論的構築の「重要な点」をフェヒナーに負っていることを隠さない。

> 私はつねにG. Th. フェヒナーのアイデアを受け入れるのに吝かではなく、重要な点に関してはこの思想家を頼みにすることもあった。
> Ich war immer für die Ideen *G. Th. Fechners* zugänglich und habe mich auch in wichtigen Punkten an diesen Denker angelehnt.（„Selbstdarstellung“. 1925. GW-XIV, S. 86）

その他フロイトがフェヒナーに触れた箇所を網羅的に挙げることは、煩瑣に過ぎるであろう。ただ、ヴィーンのベルクガッセ19番にあるSigmund-Freud-Museumに併設されたアルヒーフで保管されている以下のビッケル（Lothar Bickel）宛の、おそらくは未公刊の書簡は、史料価値が高いと思われるので、一部引用しておく。[6] 1931年6月28日付の手紙でフロイトは、自分の哲学的な拠り所に関して、その名を著作等で明確にしたことはないが、とことわりながら、スピノザの名を挙げている（「私がスピノザの教説に拠り所をもっていることは喜んで認めましょう」Meine Abhängigkeit von den Lehren Spinoza’s gestehe ich bereitwillgst zu.）。フロイトはさらに、自分には哲学の才能が欠けているので、特定の哲学者に深入りすることは避けてきたこと、特にニーチェは、鋭敏な心理学者であるがゆえに、わざと避けてきたことを語っている。最後にフェヒナーの名が出てくる。

> 快の本質について唯一有益な議論を見つけたのは、フェヒナーにおいてでした。
> Das einzig Brauchbare über das Wesen der Lust fand ich bei Fechner.

フロイトは『精神物理学原論』以外にもフェヒナーの多くの著作を自ら手に取り、読んでいるが、そのきっかけは判然としない。ただ、フロイト周辺の人たちの中にも、フェヒナーに共鳴していた人物、またフェヒナーの熱心な読者がいたことは確かである。

注目すべきはジークフリート・リピナー（Siegfried Lipiner; 1856-1911）である。[7] リピナーは1875年、ヴィーンからライプツィヒのフェヒナーのもとに遊学し、老フェヒナーにこれまでの著作を総括するような本の執筆を熱心に勧めて『光明観と暗黒観の相克』（1879年）の成立に与った学生である。リピナーはガリツィア出身のユダヤ人で、ヴィーンではブレンターノのもとで哲学を学んでいた。[8] ブレンターノはフェヒナーとの間に感覚の計測に関する書簡を交わしていたが、リピナーはブレンターノを通じてフェヒナーに興味をもつこととなったようである。ライプツィヒにやってきたリピナーは当地の知的サークルで頭角を現すが、同級の友人たちとはあまり付き合わず、ライプツィヒ市内の広大な緑地ローゼンタールでの老フェヒナーの散歩にしばしば同行し、友人たちを驚かせたと言う。[9] リピナーはフェヒナーの『ツェント・アヴェスター』を読み、またフェヒナーと会話を交わすうちに、自らの思想を分かりやすくまとめた本の執筆を老フェヒナーに勧めたらしい。またリピナーが著した5篇の長大な詩から成る作品『戒めを解かれたプロメテウス』[10] には特に『ツェ

ント・アヴェスター』からの影響を見ることができる。[11]

なおリピナーはリヒャルト・ヴァーグナーやニーチェその人にも『戒めを解かれたプロメテウス』を送り、後者からは当初好意的な評価を得た。またリピナーは1874年から75年にかけてフロイトと共同で哲学雑誌を出し、さらにグスタフ・マーラーとも近しい関係にあった。[12] フロイトやマーラーがフェヒナーの著作に大いに関心を示したのも、リピナー抜きには考えられない。このようにリピナーは、後にヴィーンでフェヒナーの思想が注目されるに当たって大きな役割を演じたのである。

ブッグレ／ヴィルトゲンはリピナーには触れていないが、フロイトの師であるマイネルト（Theodor Meynert; 1833-1892）がフェヒナーを高く評価していたこと、またフェヒナーから刺激の「閾」というアイデアを受け継いだブリュッケ（Ernst von Brücke; 1819-1892）もフェヒナーに心酔していたことが、フロイトのフェヒナー受容に影響を与えたと考えられる、としている（Buggle/Wirtgen; S. 156f.）。さらにブッグレ／ヴィルトゲンは、フロイトが「人間の精神生活に関する知見に不滅の価値をもつ貢献を成した」（einen Beitrag von unvergänglichem Wert zur Kenntnis des menschlichen Seelenlebens）（„Josef Breuer †“. 1925. GW-XIV, S. 562）と評価しているブロイアー（Josef Breuer; 1842-1925）もフロイトのフェヒナー受容に影響したであろうと言う。ドーラーによれば「非常に哲学的な傾向のあった」（stark philosophisch eingestellt［sein］）ブロイアーは、フェヒナーを特に高く評価していたらしい。ブロイアーが「ゲーテは別格として、特にフェヒナーに魅了されており、フェヒナーの世界観は彼にとっては最高のものであった」（Nach Goethe fühlte er sich vor allem zu Fechner hingezogen, dessen Weltanschauung ihm als die höchste galt.）（Dorer; S. 121）とドーラーは指摘している。

フロイトはこのように、自らの興味・関心や周囲の人物との交流を通じて、フェヒナーに接近したものと思われる。フェヒナーの著作がフロイトの理論にどのような影響を与えているのかを整理する前に、ブッグレ／ヴィルトゲンの論文の前半に記された、両者の伝記的な並行関係について、その一部を批判的に紹介したい。[13] ブッグレ／ヴィルトゲンは、伝記的並行関係があるから思想的な類似が生まれるといった乱暴な議論をしているのではもちろんない。このようなアプローチの「限界と危険性」（die Grenzen und Gefahren）を十分に意識したうえでなお両者の伝記的なものに「一連の顕著で重要な、また単に表面的で偶然であるとは思われないパラレル」（eine Reihe auffälliger, bedeutsamer und nicht nur äußerlich-zufälliger Parallelen; S. 157）があり、それが両者の著作や世界観の照応を理解する助けになるかもしれない、とするのである。

３．伝記的並行関係

ブッグレ／ヴィルトゲンがまず挙げているのは、フェヒナーもフロイトも幼いころに自分の家で父親から学問の手ほどきを受けているという点である。もっともフロイトがごく基礎的なものにとどまったのとは異なり、フェヒナーは幼くしてラテン語の読み書きが自由にできるまでになっている。また両者とも学校では「模範的な生徒」（Musterschüler）であった。ただし、両者とも自分には数学的な才能はないと感じていたようである。フェヒナーの甥で、ながらくフェヒナーと世帯を共にしていたクンツェによる伝記によれば、フェヒナーは「私には数学の才能が欠けており、どんなに努力してもたいした進歩はなかった」（［...］ ich［...］ habe es aber mit aller Mühe in der Mathematik wegen mangelnden Talentes dazu nicht weit bringen können）（Kunze; S. 37）と言っていたらしい。一方フロイトもまたその方面については、自信をもっていなかった。「私には能力や才能といったものはないも同然であった。自然科学はまったくだめで、数学はお話にならず、数量的なものについての才能は

皆無であった」（Ich habe sehr begrenzte Fähigkeiten oder Talente. Gar keine für die Naturwissenschaften, keine für die Mathematik, für nichts Quantitatives.）（Jones; Bd. II, S. 466）。フェヒナーは後にライプツィヒ大学物理学正教授の地位に就くが、数学的才能の不足を自覚しており、やがて物理学に背を向け、正教授の地位を放棄することとなる。一方フロイトは若い時に、フリース宛ての書簡で自分には「数量的な才能はまったく欠けており、計算や測定に関しては何も覚えられないのを君は知っているだろう」（Du weißt, daß ich von quantitativer Begabung keine Spur und für Zahlen und Maße kein Gedächtnis habe［...］）と書いている。（*Aus den Anfängen*; S. 289. Am 19. 9. 1901）。フロイトは著作活動の最初期にあたる1895年秋、心理学の数量化を目論む「心理学草稿」（„Entwurf einer Psychologie“）を書いているが、それを完成させることはできず、やがては心理学における数量化を放棄することになる。ジョーンズはフロイトが心理学的なものに関する統計的数字を「普段はあまり重要視しなかったし、利用価値があるとも考えなかった」（［...］gewöhnlich betrachtete er（=Freud）sie（=Statistiken）als unwichtig und unanwendbar）（Jones; Bd. III., S. 88）と伝えている。もっともフロイトが心理学に関して量的なものを全く重要視しなかったと言うこともできない。ドーラーが指摘したように、フロイトはフェヒナーのようには、心理的な量を厳密に測定しようとはしなかったと考えるべきであろう。

両者とも財政的な困難さを抱えながら、苦学の末に医学を修めるが、両者ともに一般医としての実践からは距離を取る。フェヒナーは物理学へ進み、フロイトは、サルペトリエール病院での研修から戻ったのち、神経［病］学（Neurologie）への道を進んだ。医師としての実践的な活動に対する違和感を両者とももっていたようである。フェヒナーがいわゆる一般医もしくは開業医にならなかった理由はいくつかあったが、フェヒナー自身は、医学の勉強の過程で教えられた知識や方法論などが自分にとって信頼するに値するものとは感じられなかったこと、[14] また瀉血法や包帯の当て方の初歩、簡単な助産術等を学ぶ機会を逸し、その遅れを後々どこかで取り戻せるとは思えなかったことなどを語っている（Kunze; S. 38）。フロイトもまた自分は「あの若かった頃に、医師としての地位や活動に特段の魅力を感じていなかったし、ついでに言えば後年になっても魅力を感じなかった」（Eine besondere Vorliebe für die Stellung und Tätigkeit des Arztes habe ich in jenen Jugendjahren nicht verspürt, übrigens auch später nicht.）と回想している（„Selbstdarstellung“. 1925. GW-XIV, S. 34）。もっともフロイトは精神科医でもあった。ただし晩年には「41年間に及ぶ医師としての活動を閲して自らを顧みてみるなら、自分は実際のところ、本当の意味では医師とは言えなかった」（Nach 41jähriger ärztlicher Tätigkeit sagt mir meine Selbsterkenntnis, ich sei eigentlich kein richtiger Arzt gewesen.）（„Nachwort zur ‚Frage der Laienanalyse‘ “. 1926. GW-XIV, S. 290）としている。

医師としての実践には興味をもてなかったフェヒナーとフロイトの両者はしかし、生理学（Physiologie）には多大な関心を寄せている。フェヒナーにとってこの方面の教師はエルンスト・ハインリヒ・ヴェーバー（Ernst Heinrich Weber; 1759-1878）であり、フロイトにとってそれは先述したブリュッケであった。フェヒナーは大学の様々な授業を「初回だけあるいは休みがちに」（nur zu Anfang oder unterbrochen）訪れただけであったが、ヴェーバーの生理学とモルヴァイデ（Carl Mollweide; 1774-1825）の代数学だけは例外であったらしい（Kunze; S. 37）。フロイトもまた「動物学と化学に挑戦してみたが失敗に終わった。そしてとうとう、私にとっておおよそ最高の権威と映ったフォン・ブリュッケの影響下、生理学に腰を据えることになった」（［...］dann versuchte ich’s — erfolglos — mit der Zoologie und der Chemie, bis ich unter dem Einfluß v. *Brückes*, der größten Autorität, die je auf mich gewirkt hat, an der Physiologie haften blieb［...］）（„Nachwort zur ‚Frage der Laienanalyse‘ “. 1926. GW-XIV, S. 290）としている。

両者はフランスへの留学経験をもつという点も共通している。すなわちフェヒナーは1827年にパリを訪れ、物理学者・数学者であるアンペール（André-Marie Ampère; 1775-1836）、さらには後にその二人の著書をドイツ語訳することになる物理学者ビオー（Jean-Baptiste Biot; 1774-1862）と化学者テナール（Louis Jacques Thénard; 1777-1857）のもとで研鑽を積んでいる。またフロイトが1885年、同じくパリのサルペトリエール病院でヒステリーの治療に関しシャルコー（Jean-Martin Charcot; 1825-1893）に師事したことはよく知られている。

大学での地位に関しても、両者には共通性がある。フェヒナーは、病気のせいもあって44歳の若さで教授職を退き（1845年）、病からの回復後は講義を受け持つだけになった。フェヒナーは自分自身を「大学の衛星とでもいうべき存在」（[ein] Beiläufer der Universität）（Kunze; S. 140）と位置づけ、例外的な場合を除いては会議などにも参加しなくなった。フロイトは1920年、講座をもたないいわゆる名目だけの教授（Titular-Ordinarius）になったのであるが、自分の大学での立ち位置を「周縁的」（peripherisch）であると認識していた。

> そうこうするうちに私は、講義を行うことによって ── たとえ周縁的であったにせよ ── 大学に所属していることを表明するという義務から解放される年齢に達した。
> Mein Alter hatte mich inzwischen der Verpflichtung enthoben, die — wenn auch nur peripherische — Zugehörigkeit zur Universität durch Abhaltung von Vorlesungen zum Ausdruck zu bringen [...]. („Vorwort. Neue Folge der Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse“. 1933. GW-XV, S. 3）

非常に興味深いのは、両者とも40歳前後に精神的な危機を迎え、その経験ののちにより深い心理学的洞察へ向かっている点である。また、両者とも精神的な危機の状態を「蛹」（Puppe）に喩え、そこから脱皮することを期していたことは、単なる偶然にしては出来過ぎであるように思われる。

フェヒナーは眼病が引き金になり、４年間（1840-43年；フェヒナーは39-42歳）にわたって暗い部屋に閉じ籠もり、生死の境を彷徨っている。そのような精神的危機の中で、フェヒナーは次のように語っている。

> ときおり私は、今の私の孤独な状態はただある種の蛹の状態にすぎず、そこから私は若返り、新たな活力を身につけて再びこの人生の中へ踏み出せるのではないかと考えた［…］。
> Zuweilen dachte ich wohl daran, mein jetziger abgeschiedener Zustand sei nur eine Art Puppen-Zustand, aus dem ich verjüngt und mit neuen Kräften noch in diesem Leben hervorgehen könnte, [...]（Kunze; S. 116）

一方フロイトは40歳になったばかりの1897年６月12日、フリース宛ての手紙にこう記した。

> ところで僕はノイローゼのような経験をしたよ。意識では捉えられないような奇妙な状態なんだ。鈍麻した思考、ヴェールがかかったような疑念、ときおり光がさすといったこともほとんどない…［…］僕は蛹の衣に包まれているような状態で、どんな生き物がそこから這い出すのか、神のみぞ知るといったところだ。
> Ich habe übrigens irgend etwas Neurotisches durchgemacht, komische Zustände, die dem Bewußtsein nicht faßbar sind. Dämmergedanken, Schleierzweifel, kaum hie und da ein Lichtstrahl. [...] Ich glaube, ich bin in einer Puppenhülle, weiß Gott, was für ein Vieh da herauskriecht.（*Aus den*

Anfängen; S. 182f.）

40歳を過ぎたころの二人は以上のように蛹の中でうずくまっているような、活力のない状態にあった。1847年になってもフェヒナーは、もちろん眼病の後遺症もあるのだが、読んだり書いたりすることに困難を感じており、「思考をまとめるのに苦労し」なくてはならなかった（[...] immer noch fällt es mir schwer, die Gedanken zu bannen.）（Kunze; S. 125f.）。一方フロイトはこの時期、一連の自己分析（Selbstanalyse）を続けており、1897年10月15日付フリース宛ての長大な手紙では「僕は僕自身が母親を愛し父親に嫉妬していたことに気づき、それが幼い子供にとっては一般的な事態であると考えている」（Ich habe die Verliebtheit in die Mutter und die Eifersucht gegen den Vater auch bei mir gefunden und halte sie jetzt für ein allgemeines Ereignis früher Kinder [...]）（*Aus den Anfängen*; S. 193）と、エディプス・コンプレックス理論の萌芽を記している。[15] しかし間もなくフロイトはそのような自己分析に行き詰まり（「僕の自己分析はまた行き詰まって［…］（Meine Selbstanalyse stockt wieder einmal [...]; Ebd., S. 197）「目下僕は本を読むことも考えることもできずにいる。観察するだけで精根尽き果てているんだ」（Gegenwärtig kann ich weder lesen noch denken. Das Beobachten zehrt mich genug auf.）（Ebd., S. 197）と書き送っている。思考はおろか、読み書きも困難な危機的状況が40代の二人を襲ったことのみならず、その後二人が爆発的な仕事を成し遂げたことまでが共通しているのは興味深い。蛹から這い出てきたのは、実験心理学と深層心理医学の確立者たちであった。

感覚量の定量的測定という実証主義的な自然科学を推進したフェヒナーが、万物に神の意識の分与を説く汎神論的な自然哲学者でもあったことは、これまで何度も強調してきた。以前の稿[16]で筆者は、フェヒナーが自然哲学が自然科学にとって替わられようとする19世紀を生きたこと（フェヒナーの生没年は19世紀とほぼ重なる1801年－1887年である）、そしてそのような自然哲学から自然科学へのパラダイム転換が、フェヒナーという一個人のなかで、モデルネの「きしみ」となって現れたことを論じた。フェヒナーの後任となったヴィルヘルム・ヴント（Wilhelm Wundt; 1832-1920）はフェヒナーの生誕百年祭で、厳密な自然科学者でもあったフェヒナーの哲学が、信仰と境を接していたこと、「本質的には宗教哲学、いやおそらくより精確には、弁神論であった」（[...] wesentlich Religionsphilosophie oder, vielleicht noch treffender ausgedrückt, Theodicee.）（Wundt; S. 40）と述べ、フェヒナーの思想がある意味「夢想的」（phantasievoll）（Wundt; S. 41）であったと言う。フロイトもまた、厳密な学としての心理学を構築しようと試みながら、やはりそれでは割り切れないもの、つまりある種の対立を常に抱えていた。フリースとの書簡集の編者の一人であるエルンスト・クリス（Ernst Kris）は、「その対立とは［…］直観的な理解と科学的な説明の間の対立である」（Der Gegensatz [...] ist der zwischen intuitivem Verständnis und wissenschaftlicher Erklärung.）（*Aus den Anfängen*; S. 20）と述べている。またジョーンズもフロイトの中に、「ペダンティックなまでの忍耐強さと合理的な即物性」（pedantisch[e] Geduld und rational[e] Sachlichkeit）と「創造的思弁のデーモン」（[D]er Dämon der schöpferlischen Spekulation）そのものである「夢想的自我」（phantastisches Ich）（Jones; Bd. II, S. 504）が共存していたことを指摘している。たしかに二人とも経験的な事実、empirisch なものを重視し、定量的な学問である数学や物理学、あるいは生理学に学問の規範を求めた。フェヒナーの「精神物理学」はその名称からして物理学が基盤である。しかし『精神物理学原論』（1860年）はそれに先行する『ツェント・アヴェスター』（*Zend-Avesta*; 1851）における自然哲学的思弁を、自然科学の言葉である数学や物理学に翻訳しようとする試みであったとも考えられるのである。[17] フロイトもまた最初期、1885年の秋に成立したいわゆる「心理学草稿」では次のように述べている。

> この草稿の意図は自然科学的な心理学を提供すること、つまり心理的な過程を明示可能な物質的部分の特定の定量的状態として提示し、それによって心理的な過程を瞭然と矛盾なく示すことにある。
> Es ist die Absicht dieses Entwurfs, eine naturwissenschaftliche Psychologie zu liefern, d. h. psychische Vorgänge darzustellen als quantitaiv bestimmte Zustände aufzeigbarer materieller Teile, und sie damit anschaulich und widerspruchsfrei zu machen.（„Entwurf einer Psychologie“, *Aus den Anängen*; S. 305）

しかしフロイトはこの草稿を公表せず、まさに引出しにしまいこみ、先述したようにこの方向性を放棄することになる。[18] つまり両者は、心理的なものの極端な数値化・物理化には与しなかった。フェヒナーは晩年の著作『光明観と暗黒観の相克』で「自然研究者は心理学を化学の一分野のように見なす傾向がある。つまり原形質の中の炭素、燐、酸素から精神が生まれると考えるのである」（Die Naturforscher［...］neigen dazu, die Psychologie als einen Zweig der Chemie zu betrachten: aus Kohle, Phosphor und Sauerstoff im Protoplasma kommt der Geist.）（*Tagesansicht*; S. 7）と心理的なものの唯物論化を揶揄している。フロイトもまた「いかなる生理学的表象も、いかなる科学的プロセスも、心の本質を我々に予感させるものではない」（Keine physiologische Vorstellung, kein chemischer Prozeß kann uns eine Ahnung von ihrem（=Psyche）Wesen vermitteln.）（„Das Unbewußte“. 1915. GW-X, S. 266f.）としている。

厳密な科学としての心理学と心の不可知論的闇の間の隘路を進む両者は、ときおり後者に親和性を示すこともあった。すなわち両者は、アンビバレントかつ慎重にではあるものの、オカルト的なものへの傾きを共有しているのである。フェヒナーの『光明観と暗黒観の相克』には「降霊術」（Spiritismus）の章がある。フェヒナーはあまり気が進まないものの、何度か降霊会に参加し、次のように述べている。

> いずれにせよ私は、降霊現象そのものの可能性を疑うように強いる理論的根拠をまだ見出すことはできないものの、それらの現象の事実性を承認するように強いる経験的根拠をも見出せずにいる。もっとも特にいわゆる物質化現象及びそれにまつわることについては、それを信じることを強いられたとしても喜んでというわけにはいかない。
> Jedenfalls finde ich nach all dem keine zwingenden theoretischen Gründe, die *Möglichkeit* spiritistischer Erscheinungen überhaupt zu bestreiten, hingegen zwingende *empirische* Gründe, die *Tatsächlichkeit* solcher Erscheningen anzuerkennen, obschon ich mich diesem Zwange insbesondere bezüglich der sog. Materialisationserscheinungen und was damit zusammenhängt, nur mit Widerstreben füge.（*Tagesansicht*; S. 254f.）

自らの汎神論的「光明観」（Tagesansicht）は、「降霊術があろうとなかろうと成立するが、できればそれなしで済ませたいものだ」（Die Tagesansicht kann mit oder ohne den Spiritualismus bestehen; bestände aber doch lieber ohne als mit demselben［...］）（Ebd., S. 272）とフェヒナーは言う。降霊術が「健康な生活そのものと健康な生活のための科学に適合しない」（sich weder in das gesunde Leben noch die Wissenschaft um das gesunde Leben passend einfügt）（Ebd., S. 272）ことを、フェヒナーは強調するのである。

フロイトの場合はどうであろう。ジョーンズはフロイトが「懐疑と信じやすさの間を大いに揺れ

動く」（ein ausgesprochenes Schwanken zwischen Skepsis und Leichtgläubigkeit）（Jones; Bd. III, S. 437）性質をもつことを報告しているが、それはまたオカルト的なものについても例外ではなかった。「オカルト的なものについても、フロイトの懐疑と肯定的な態度に関しては同じくらい豊富な証拠を挙げることができる」（ebenso viele Beweise für seinen Zweifel wie für seine positive Stellungnahme in Dingen des Okkultismus anführen kann）（Ebd., S. 437）とジョーンズは言う。そしてジョーンズはその浩瀚な伝記で、フロイトのオカルト的なものへの接近と離反、どちらかといえば接近、特にテレパシー現象への帰依を跡付けている。フロイトは事実、1921年に「精神分析とテレパシー」（„Psychoanalyse und Telepathie“）（死後の1941年公刊）、1922年には「夢とテレパシー」（„Traum und Telepathie“）という論文を書いている。また1933年の『続精神分析入門』の中には「夢とオカルティズム」（„Traum und Okkultismus“）という講義が収められているのである。ジェームズ・ストレイチーはフロイトが「もはや、オカルティズムについて論じることの妥当性について、いかなる疑問も感じていなかったという事実は、一言しておく価値があるだろう」[19] と評している。

もう一つジョーンズから付け加えておきたい。フロイトは1921年の夏、オカルト研究の雑誌を発行していたニュー・ヨークのヘアワード・キャリントン（Hereward Carrington）から、雑誌の共同編集者になってほしいと乞われたことがあった。フロイトは断りの返事をしたのだが、その際、こう言ったという。

> もしもう一度人生を最初から始めなければならないとすれば、私は精神分析よりも超心理学研究の方に一身を捧げることでしょう。
> If I had my life to live over again I should devote myself to psychical research rather than to psychoanalysis.（Ebd., S. 456）

フェヒナーとフロイトの伝記的な共通性の最後に、両者とも死の問題に格別の興味をもち、その問題と格闘したということを挙げておきたい。フェヒナー（「ミーゼス博士」の匿名で発表）の著作の中でもっとも成功し、生前に唯一重版（３回）されたのは、『死後の生についての小冊子』（*Das Büchlein vom Leben nach dem Tode*; 1836）であった。[20] フェヒナーはここで魂の不滅、此岸と彼岸の連続性を説く。また1851年の『ツェント・アヴェスター』第２部後半は Über die Dingen des Jenseits というタイトルで、やはり死後の生活のことが論じられている。フロイトの場合、死後ではなく、死そのものへ向かう衝動が問題になる。いわゆる「死の衝動」（Todestrieb）ないしはエロスと対を成すタナトスの問題である。これについてはフェヒナーの恒常性原則、快原則の「彼方」（Jenseits!）、「涅槃原則」等と関連するので、続稿で取り上げることとする。いずれにせよジョーンズは「フロイトはその生涯にわたって死に関して大いに思考し続けた」（Sein ganzes Leben hindurch beschäftigte sich Freud viel mit dem Gedanken an den Tod.）（Jones; Bd. II, S. 459）としている。

ブッグレ／ヴィルトゲンは両者の共通点としてその他に、質素な生活ぶり、真理探究に対する妥協のなさ、揺るぎない自己確信、ドグマや因習を無視する知的大胆さ、敵対・孤立・誹謗中傷を恐れないこと等々を挙げているが（Buggle/Wirtgen; S. 165）、詳しく論じてはいない。我々もこれらの点については、フェヒナーとフロイトの共通項として取り上げなくてもよいであろう。というのも、質素な生活ぶりという点を除いて、これらは独創的な人間に普遍に共通する特徴だからである。視点を変えると、フェヒナーもフロイトも、その独創性という点において、範例的であったと言うことができるであろう。

次稿以下では、フロイトが自らのメタ心理学の構築に際してどのようにフェヒナーを受容していったかを、具体的に検証することになる。

（続）

（本稿はJPS 科研費24520362の助成を受けたものです）

注

1 岩淵輝はフェヒナーの評伝『生命の哲学　知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯』（春秋社、2014年、304頁以下）でフェヒナーがフロイトに及ぼした影響について、後述するエレンベルガーの研究を紹介している。

2 以下、オリジナルの強調（隔字体や斜字体）はイタリックで表記し、日本語には傍点を付す。

3 Vgl. Buggle /Wirtgen, S. 151.

4 なおエレンベルガーのこの論文は２回日本語に翻訳されているが（参考文献表参照）、新たに訳出した。雑誌「精神分析」の浜崎隆治訳は the inspirations for the more theoretical part を「より理論的部分に対して示唆（を得た）」、みすず書房版の訳は、「理論的部分のいくつかのインスピレーション」と訳している。前者のほうが原文に忠実であると言えるであろう。

5 ただし２ページにわたるような記述でもインデックスには１回しか出てこないので（例えばGW-XIII, S. 4およびS. 5の場合、インデックスにはS. 4としか挙げられていない）、フェヒナーの名が13回しか出てこないというわけではない。

6 閲覧と筆記体の「解読」にあたっては、Sigmund-Freud-Museum 付設アルヒーフのファクサ女史にお礼を申し上げる。一部のみ訳すのは、アルヒーフから全文の公開はしないでほしいという要請があったためである。なおこの書簡の資料番号はSignatur 21/73である。アルヒーフによれば、この書簡が掲載された書簡集は刊行されていないとのこと。ただしピーター・ゲイはその浩瀚なフロイト伝の中でこの書簡に言及しており、書簡の存在自体は研究者の間では知られている。Vgl. Peter Gay: *Freud. Eine Biographie für unsere Zeit*. Aus dem Amerikanischen von Joachim A. Frank. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main 2006. S. 58.

7 リピナーについてはすでに以下の論文で触れたことがある。福元圭太：「フェヒナーにおける光明観と暗黒観の相克 ── グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（5）──」『かいろす』第51号所収、かいろすの会、2013年、18-39頁。リピナーについては23頁以下。

8 Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur. Gustav Theodor Fechners wissenschaftlich-philosophische Weltauffassung*. Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main 1993. S. 87.

9 Hans-Jürgen Arendt: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. Peter Lang, Frankfurt am Main 1999. S. 216.

10 Siegfried Lipier: *Der entfesselte Prometheus. Eine Dichtung in fünf Gesängen*. Breitkopf und Härtel, Leipzig 1876.

11 Vgl. Michael Heidelberger: *Die innere Seite der Natur*. a. a. O., S. 88. Anm. 192.

12 リピナーはヴィーンでいわゆる「リピナー・サークル」（Lipiner-Kreis）の中心となり，マーラーもそこに加わっていた。リピナーは禁欲主義的な「共感宗教」（Mitleidreligion）を奉じ、厳密な菜食主義を取り入れた。リピナーとマーラーの関係が破綻したのは、マーラーとアルマとの

結婚にリピナーが反対したことが原因であった。

13　ブッグレ／ヴィルトゲンが指摘するフェヒナーとフロイトの伝記的並行関係の中には、牽強付会と境を接するものもあるので、それらは割愛した。またときおり見られる不正確な引用は、原典に当たりこれを正した。またブッグレ／ヴィルトゲンが引いていないテキストも参照し、引用した。しかし個々の伝記的並行関係の指摘そのものは、全面的にブッグレ／ヴィルトゲンに負っている。

14　そのような医学への懐疑をユーモラスに表現したのが、フェヒナーが「ミーゼス博士」（Dr. Mieses）の匿名で発表した『月がヨードでできていることの証明』（*Beweis, daß der Mond aus Jodine bestehe*; 1821）である。

15　フリース宛の手紙では実際にエディプス王の名も挙げられている。子供が母親を愛し父親を憎むことが一般的であるとすれば「心を鷲掴みするエディプス王の魅力が分かるというものだ」（[...] so versteht man die packende Macht des Königs Ödipus [...]）（*Aus den Anfängen*; S. 193）。ただしフロイトが著作の中でエディプス・コンプレックスという表現を用いたのは、1910年の著作「男性に見られる対象選択の特殊なタイプについて」（„Über einen besonderen Typus der Objektwahl beim Manne“. GW-VIII, S. 73）であるとラプランシュ／ポンタリス（『精神分析用語辞典』27頁）は指摘している。

16　拙稿「フェヒナーにおけるモデルネの「きしみ」── グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（2）──」『言語文化論究』第26号所収、九州大学大学院言語文化研究院、2011年、1-22頁。

17　これについては拙稿：「『精神物理学原論』の射程 ── フェヒナーにおける自然哲学の自然科学的基盤 ──」『西日本ドイツ文学』第24号所収、日本独文学会西日本支部、2012年、13-27頁を参照。

18　この草稿は約50年後に、フリース宛ての一連の書簡と共に「発見」されることになる。その出版はようやく1950年、ロンドンのイマーゴ出版社刊の *Aus den Anfängen der Psychoanalyse* に所収されることによって果たされた。

19　ジェームズ・ストレイチー：『フロイト全著作解説』北山修（監訳・編集）、人文書院、2005年、357頁以下。

20　この本は日本においても数回翻訳出版されている。①『死後の生活　附録：フェヒネルの生活及び哲學』フェヒネル著、平田元吉訳、丙午出版社、明治43年（1910年）、全242頁（文中ではフェヒ子ルという表記も使用されている）。また同社より大正13年（1924年）に同訳者による新版発行、全277頁。ここではフェヒナー自身が1866年および死の直前の1887年に、重版に当たって付した著者前書きも訳されている。②『死んだら如何なる』フエッヒネル著、田宮馨（意訳）、帝國神祕會、大正15年（1916年）、全192頁。この本は9センチ×12.5センチという袖珍本で、稀覯本に属するが、幸運にも筆者は全国展開している新古書店のワゴンでこの本に邂逅することができた。③『死後の生存』フェヒネル著、佐久間政一訳、北隆館、昭和23年（1948年）、全134頁。④「霊魂不滅の理説」、『宇宙光明の哲学・霊魂不滅の理説』所収、フェヒネル著、上田光雄訳、光の書房、昭和23年（1948年）、全390頁の318頁以下。⑤『フェヒナー博士の 死後の世界は実在します』フェヒナー著、服部千佳子訳、成甲書房、平成20年（2008年）、全156頁。帯には「初の日本語版ここに誕生！」と謳われているが、調査不足の感は否めない。しかもこの版は英語からの重訳である。また造本もタイトルも惹句も「際物的」で、大型書店ではオカルト本コーナーに並べられていた。

文 献 一 覧

Arendt, Hans-Jürgen: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutscher Naturwissenschaftler und Philosoph im 19. Jahrhundert*. Peter Lang, Frankfurt am Main 1999.

Buggle, Franz / Wirtgen, Paul: Gustav Theodor Fechner und die Psychoanalytischen Modellvorstellungen Sigmund Freuds. Einflüsse und Parallelen. In: *Archiv für die gesamte Psychologie*. Bd. 121, 1968. S. 148-201.

Binswanger, Ludwig: Freud und die Verfassung der klinischen Psychiatrie. In: *Schweizer Archiv für Neurologie und Psychiatrie*. Gesellschaft für Psychiatrie. Institut Orell Füssli. Bd. 37, 1936. S. 177-199.

Briebach, Thomas: *Das Konstanzprinzip im theoretischen Werk Sigmund Freuds*. Campus Verlag, Frankfurt am Main/New York 1986.

Dorer, Maria: *Historische Grundlagen der Psychoanalyse*. Veralg von Felix Meiner, Leipzig 1932.

Ellenberger, Henri F.: Fechner and Freud. In: *Bulletin of Menninger Clinic*. Vol. 20 (4). Topeka (Kansas) 1956. pp 201-214.（「フェヒネルとフロイド」浜崎隆治訳、「精神分析」東京精神分析學研究所出版部、Vol. XV, No. 10. 昭和32年10月号所収、1-11頁。また『エランベルジェ著作集１　無意識のパイオニアと患者たち』中井久雄編訳、みすず書房、1999年所収、83-105頁。）

Fechner, Gustav Theodor: *Zend-Avesta oder über die Dinge des Himmels und des Jenseits. Vom Standpunkt der Naturbetrachtung*. 2. Aufl. Erster Band. Verlag von Leopold Voß. Hamburg und Leipzig 1901.

Fechner, Gustav Theodor: *Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht*. Breitkopf und Härtel, Leipzig 1904.（2. Aufl.）

Fechner, Gustav Theodor: *Elemente der Psychophysik. Dritte unveränderte Auflage. Erster Teil / Zweiter Teil*. Breitkopf und Härtel. Leipzig 1907.

Freud, Sigmund: *Gesammelte Werke. Chronologisch geordnet*. Imago Publishing Co., LTD. London 1941-51.

Freud, Sigmund: *Aus den Anfängen der Psychoanalyse. Briefe an Wilhelm Fließ, Abhandlungen und Notizen aus den Jahren 1887-1902*. Fischer, Frankfurt am Main 1962.

Gay, Peter: *Freud. Eine Biographie für unsere Zeit*. Aus dem Amerikanischen von Joachim A. Frank. Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt am Main 2006.

Hall, Stanley : *Die Begründer der modernen Psychologie.*（*Lotze, Fechner, Helmholtz, Wundt*）. Übersetzt und mit Anmerkungen versehen von Raymund Schmidt. Felix Meiner Verlag, Leipzig 1914.（Original: *Founders of modern psychologie*. New York 1912.）

Heidelberger, Michael: *Die innere Seite der Natur. Gustav Theodor Fechners wissenschaftlich-philosophische Weltauffassung*. Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main 1993.

Hermann, Imre: Gustav Theodor Fechner. In: *Imago*. Bd. XI, 1925, S. 371-418. のちに別冊抜刷としても刊行された。Hermann, Imre: *Gustav Theodor Fechner. Eine psychoanalytische Studie über individuelle Bedingtheiten wissenschaftlicher Ideen*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag, Leipzig/Wien/Zürich 1926.

Hérouard, Béatrice: „Bindung-Entbindung“: Das Ich Freuds, bewegt durch die Erfindung Fechners der psychophysischen Tätigkeiten.（sic!）In: *Gustav Theodor Fechner. Werk und Wirkung. Ehrensymposion aus Anlass seines 200. Geburtstages und 8. Fachtagung der Fachgruppe Geschichte der*

Psychologie der Deutschen Gesellschaft für Psychologie. Hg. von Anneros Meischner-Metge. Leipiziger Universitätsverlag, Leipzig 2010. 1988. S. 187-192.

Jones, Ernest: *Das Leben und Werk Sigmund Freuds. Bd. I-III*. Huber, Stuttgart-Bern 1960-62.（Original: *The life and work of Sigmund Freud*. New York 1953-55.）

Kunze, Johannes Emil: *Gustav Theodor Fechner. Ein deutsches Gelehrtenleben*. Breitkopf und Härtel, Leipzig 1892.

Lipier, Siegfried: *Der entfesselte Prometheus. Eine Dichtung in fünf Gesängen*. Breitkopf und Härtel, Leipzig 1876.

Nitzschke, Bernd: Freud und Fechner. Einige Anmerkungen zu den psychoanalytischen Konzepten „Lustprinzip“ und „Todestrieb“. In: *Freud und die akademische Psychologie. Beiträge zu einer historischen Kontroverse*. Hg. von Bernd Nitzschke, Psychologie Verlags Union, München 1989. S. 80-96.

Spehlmann, Rainer: *Sigmund Freuds neurologische Schriften. Eine Untersuchung zur Vorgeschichte der Psychoanalyse*. Springer-Verlag, Berlin/Göttingen/Heidelberg 1953.

Sulloway, Frank F. : *Freud – biologist of the mind. Beyond the psychoanalytic legend*. New York, Bacic Books.（dt: *Freud. Biologe der Seele. Jenseits der psychoanalytischen Legende*. Köln/Hohenheim 1982）

Tögel, Christfried: Fechner und Freuds Traumtheorie. In: *G. T. Fechner und die Psychologie. Internationales Gustav-Thodor-Fechner-Symposion Passau vom 12. bis 14. Juni 1987*. Hgg. von Joseph Brožek und Horst Grundlach. Passiva Universitätsverlag, Passau 1988. S. 131-135.

Wundt, Wilhelm: *Gustav Theodor Fechner: Rede zur Feier seines hundertjährigen Geburtstages*. Verlag von Wilhelm Engelmann, Leipzig 1901.

Wyss, Dieter: *Die tiefenpsychologischen Schulen von den Anfängen bis zur Gegenwart. Entwicklung, Probleme, Krisen*. Vandenhoeck und Ruprecht, Göttingen 1961.

岩淵輝：『生命の哲学　知の巨人フェヒナーの数奇なる生涯』春秋社、2014年。

福元圭太：「フェヒナーにおけるモデルネの「きしみ」── グスターフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（2）──」『言語文化論究』第26号所収、九州大学大学院言語文化研究院、2011年、1-22頁。

福元圭太：「『精神物理学原論』の射程 ── フェヒナーにおける自然哲学の自然科学的基盤 ──」『西日本ドイツ文学』第24号所収、日本独文学会西日本支部、2012年、13-27頁。

福元圭太：「フェヒナーにおける光明観と暗黒観の相克 ── グスタフ・テオドール・フェヒナーとその系譜（5）──」『かいろす』第51号所収、かいろすの会、2013年、18-39頁。

ジェームズ・ストレイチー：『フロイト全著作解説』北山修監訳・編集、人文書院、2005年。

ラプランシュ／ポンタリス：『精神分析用語辞典』村上仁監訳、みすず書房、1990年（第８刷）。

Von Fechner zu Freud (1)

—— Gustav Theodor Fechner und seine Genealogie（6）——

Keita FUKUMOTO

Während Fechner als der Begründer der experimentellen Psychologie, die das Psychische quantitativ messen will, gilt, wird Freud als der Begründer der Tiefenpsychologie, die das Psychische für die Erscheinungsform des unmessbaren unbewussten Dynamik hält, gesehen. Zwischen den beiden Psychologen gibt es also anscheinend einen großen Unterschied. Bei genauerem Hinsehen erkennen wir jedoch, dass das nicht der Fall ist. Denn Fechner hat auf Freud einen enormen Einfluss ausgeübt.

Anhand von Recherchen bisher veröffentlichter Sekundärliteratur über dieses Thema habe ich in diesem Aufsatz versucht, den Spuren des Einflusses von Fechner auf Freud nachzugehen. Als ersten Teil dieses Versuchs werde ich „eine Reihe auffälliger, bedeutsamer und nicht nur äußerlich-zufälliger“ Parallelität des autobiographischen Fortgangs beider Protagonisten, wie z. B. den „Mangel“ an mathematischer Begabung, das Aufgeben der allgemeinärztlichen Praxis, das Interesse für Physiologie, den Studienaufenthalt in Paris, die „peripherische“ Stellung beider in der Universität, die Lebenskrise in ihren 40ger Lebensjahren, die Neigung zum Okkulten und das Ringen um das Thema „Tod“, darstellen.